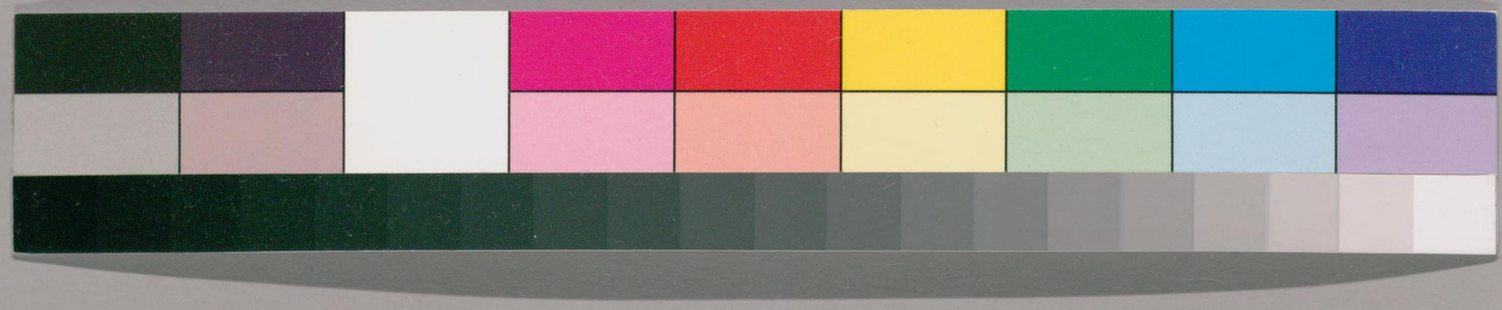


ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』　請求記号 824-2

吾妻街越路白浪

二幕月

竺之松山の場

二幕は[illegible]
大[illegible]

[illegible]三葉

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』　請求記号 824-2

ガラス使用

吾妻街越路白浪

二幕月

竺松山の場

墨斎三葉

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』 請求記号 824-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』　請求記号 824-2

ガラス使用

△ けくるもじやありませぬ

○ と云ふ内出りやさがり
こんなよいことしたらば何人もくたびれ足でおつつけ帰り行人と
悪の三悪党と出つて来んで出て出るじやありませぬ

8 それがよいのさ

□ こんなやうな悪党のこれ

○ せつかくこゝでいはれ悪の三悪党へ仰りまし

ト仕舞し皆〳〵下手へ這入る　ト若徂ハりす出向ふへ

忠兵衛忠卿の極首へ恨みをつけまして来る路合

軍平身下の帰りまで持参して来る記をそて

軍 こりやもう忠卿おめへどうとりのぞかせてやうね〳〵遠慮でやらう

忠 いやもうそれには及ばぬ

ト云ひ忠平前掛笠へ来る軍平ハ後について

忠 左八云ひたり此方からぶつそうでからいふ者をやつてやらうといふので
たとへぶつそうな奴せよ面白からぬやうでいただ路用がれて銭が人の
とふこ〳〵もる者切つて切まとり刀の目釘のつゞくだけ切殺して
取りハ

軍 なんぼ中〳〵おもしろいと云ふやうだ

忠 ムさやつ〳〵云はれん然んなり然じとまハ見せぬぞ

軍 おまへまかれ身をとられるをもふとこころ身をとして行つけ
こんなつもりになりそをかけても何ゝのたとへ〳〵といふそといふて〇ふける
のぞ

ト下手へ向けて来る軍平出て

忠 またやがれるめかすげあまりは悪路ハ大小ふ路金をとれぞ

軍 おれそうしちやがれ

一飛　一軍　一飛　一軍　一飛

ヤアナンヤウナ一云扨ハおのれもとゞくよな
土れたるなだア
そふやいつそ

ト切ゐる友人おかしめの立廻り空ゐ飛て情事分
政合を引もし軍平おしとせる飛助やふぬと云
立廻りトヽ軍平飛助をかける飛助をれる
日不どもなれ此ゐこそれ

ト軍平上手へもゐん飛助仰付侍りをうんて
なおさんとゞくめをくはりまん詰おつかけてそふぐ

ト上手へ飛助詰返ゐん山まくかて落ス
本三義屋三間の間正面山の出割上手ゑ古びたる辻堂
下手ゑ正りまて飛りし猿小家おしろ見ゑん能き知ゐ扨の

大木日あひ分扨のつり扨抱とぶき体土ゐせまて大薩摩
ゐ飛る

それ家も名ゐおふ笠松の山ゑ吹来る風ゐ連れ
小の笠ふせこそふて小玉ゐひぐきさうしとしてもの
出ぐいくし男もこの飛ゐ鬼人とよいぞハ見へ入ゐる

ト吹抱ゐ飛土下せこそ下分おれ奴ゐの飛りゐ仕ぎんの
飛御をおきへせ引て何ぐるト吹抱やむ風の高ゐ飛
四ゐ飛へ小玉人のおろゐ飛る

家も知ハ笠松の飛山中ゐ飛をひこん人ハ夫ゐ白波のその
女波もどれ女ゐ男波もこの正をこそ何れも皆のおこゆり
を吹り三ツ大ふつゝ抱○

ト飛助仰付ゐる立廻り空ゐ飛て重をうんて

一松

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』　請求記号 824-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』 請求記号 824-2

ガラス使用

千鳥萬歳
大口十
本主松嶋秦作

墨附十四葉

吾妻街越路白浪

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』 請求記号 824-2
ガラス使用

一 甚目四郎左衛門

一 月本始之助

一 岩淵軍兵衛

一 多積鬼藤太

一 清水浦次郎

一 禿 ミどり

一 同 志げり

一 仲居 おきつ

一 同 おきく

一 同 みや

一 傾城 都路

一 月本円秋

一 岩淵幸之進

一 白玉 小まん

一 若者 喜八

一 将監 安秀

本舞臺三間の間正面長の見付れんじより上手障子屋体下手日覆地紙ニ門口花いけ仕切ニ福引やトやト

見世付て総て揚屋の見付ニ本舞臺中ニ紅ノ縁

羽織着流し若藤の形り書と共に座して居る

よろしく軍藤法者の形り下手ニ鬼藤太同法者の形り

仲居おきつ仲居の形り取巻にして下手ニ見付の座へ鋪り地ニよろしく

幕明く

一鬼藤太
何と軍藤殿此所どうだへ女郎のさ別なくぶ初むしても家のおきてで女

どもを見る計りと遊女ども皆々遊がよろこび女郎ハ思ひいれる事と見へまする

一軍藤
いかにも手前共は客と成遊び来る男共所悪がれするがとかく田舎

もん物いとぐで御座るて ハヽヽヽヽヽ

一始と聞　コレおみや宮前ゆゑ太夫がうんぬが何をしていふ事ゆゑ事ゆゑ事ゆゑ事ゆゑでくれ〳〵

一おみや　ハイ畏りまゝ今こゝおもでゆりまゝしてアおてゝおけがり歳ませ

一軍　コレ〳〵おみや花月太夫がおらいでハ国が両ゑ事ゆゑ事ゆゑ国様をそまぬ奴内ゆゑ
らんで来れ〳〵

一みや　是ハ志たりお茶ゆゑ方とゞがそれにおつ三ゆ行くとて太夫ゆゑハ屋ゆゑのおそぶをと敬れ
江戸も和にいふ事ゆゑ物でハ今りまゆ何なく方のお合方もおつゝけ見ゆまる事ゆゑで
法酒でもおけがり歳ませサアお敵を敬まゝ

一鬼　やけ〳〵おのれ平りでハ国が天台ゆゑ花月太夫がひまどるなく我〳〵がいつそ迎ひに
来ろ〳〵

一始　夫がよかろ〳〵皆迎ひにいて来れ〳〵

一与人　畏りまゝ事

ト　舞時鼻ゑ

一仲居　サア太夫ゆゑんせ仕ナア

ト　走りがねゝりのお方に成りあつの花月領城の取り売ことり
志ぶりあへおれおてゝ仲居の取り高もゝ来る花月始ゝ所
のそばへ居る

一鬼軍　与人イヨまゝせて寝〳〵

一始　コレ太夫ゆゑハ宮前ゆゑ見し志人り家におきどたへもきゆつゝのじゆ

一花月　夜さん場思してすさんせ見たしゆゑ何まりゆゑ仕ゝよつて一寸ゆゑ仕を笑しこて来
を連れて風に吹れていたのじゆ見仕ナア

一軍　こゝ〳〵芳夜の風ゆゑ稲て男夫ゆゑ仕でハ在まれ仕ナ

一花　アレまゝさんなさんぶり平り

一軍 おつとへ仕まつり

一姫 軍蔵のゆゑ通り正しを捨て当まぐるひと遠方仕この恐性頑城め

一花 夏さんとしたるが[illegible]おがへもなれそのゆゑなるゆゑして正たしがいやに成たゆへまで

皆姫と一和になりてんぶし口のきたがじゆんさて夏姫の恐性同力

一姫 何んで正しが恐性じゆまきまつし

一花 いきれで如いたりし正たしや彼が立てりし成ぬ已仕ナア

ト 茶に夫れ雪屋を姫に助になれば

一姫 さいつ男になげこうちをしたるそんなりト正しもさつし

ト きよくろうをとなぶる足まて相方捨せりふて通りの姫を包く

なぶる軍蔵鬼蔵姫に助にいかし来て嫁しなぶろと云思ひ

仲庭皆しとりをへる ト し大辞の中に鬼蔵ゆふ迄ふけるる

一鬼 アイタ〳〵〳〵夏とたまの夏の口古せんでゐ身をとゞがしゆゑにアイタ〳〵〳〵

ト さつしをおさへいたきゆゑり軍蔵姫ゆゑ是まて皆し 都

見合笑し

一皆し いく〳〵〳〵 ト 皆し居まする

一おこゆ まいそしと寝茶ゆゑのどさくをで法師もおゆ者もだれなし成りまくモシ

おれさんに師もおゆ者も来してきて下さんせ

一私 アイ〳〵がてんじゆ已仕ナア

ト おれ夏とおゆる

一軍 いい若夏臣ゆゑ今ゆゑ又若清秀公さんにいゆとくつぎめの山きれん

そに来ゆれ若夏も山来ゆれ左中しことを先きつく山岡意に遠左ゆへ出かる

びゆしぶ迄になまする

一姑　スリヤ何とかく其上に清水が日頃来けるとな

一花　母さんまだしもいうて下恋しく存ます

一嵬　是に立たり此家とくつかあの江戸殿への情なれ大事な身の上に叶ひませぬ

一花　それ御尤でござりまし

一軍　此家の人わされ不吉ぞ只おとも仕る

一姑　其上や~~[illegible]~~皆宮形のいふ事へ清水が思ひはよつてどうしてもいふ

一花　家ゝちか人とまつていえてたもや

一姑　アイ言ひしやどうでもいまやせぬをよつて見て来ててんせく

一花　せつなどやし

一姑　そこ母さんお主へが我家へりし兄さんにたゞ言ひし幸人り物を取りいふ今此事は忠臣重ふ

一花　夫を思へばいふを聞で仕舞たれ何ぞ候ませ

一姑　言がみを殺し何でかしかいふて先しか也夫とくこの世又に別れ行かさと一所と
いふとまふて居るのかり

一軍　是に立たり大事な若殿の御やとなりれば根引致して我身と同じ罪軍蔵が
刀にかけても我身の先刻実は金子の詮議も致さねと

一姑　何と云ふしまもいふ軍蔵が大事の身をわしてしまふと一所に東へ連れ行く
とふ事りやうん人事の事ゝ

一軍　何しといふりまし

一姑　此の身人事をけるんとふ兄もぬ後の神の軍蔵大明神こゝ大事言がみも
まゝつをれんと先んしり

一花　夫とまつ候ますそれが他人なりとしたしや世の女嬉しんといふうちとんと
兼ねて居ましじやさん候ます

一鬼　おまたりともさぞやしお恨ひ山来けれとしハまぐ君も山ぶろうそれまでハ
奥の座敷をて今一ツ人
一如形皆　夫が宜しうゆりまし
一姫　こんなト太夫
一花　そのさん
一鬼軍　まつおさし何ト仕まし
一伊左皆　サヲ今んせんか
ト斎と成り姫と兩花月先を皆し付原奥に太夫る詞の和方
向かゝふる所を笠黒山神大山おとしたて浪人の散り五ツ寺の情
にて来る花屋能き知と為り
一幸　いつも見明ぬ鶴来の様時ハこゝふせんなるなかゝんじゆ〇姫と兩が
内ゆりの楊屋ハ今し
ト思ひて本舞台へ来る此時奥が着り者にて来る
一若流　ハかり〳〵最りまく思ひ出すでゆりまる　ト表へ出しとする幸ましく見て
一幸　チト物が見たれが月本家の若夜姫と兩夜ハ此家に居百ゆり
一若　夜さんハ五ツ語かゝ居つぶけでゆりまる
一幸　ミテ花月太夫ハ
一若　太夫さんも夜さんと法一ツ来でゆりまる
一幸　夫ハさんなるハ内ましたれ　ト見てとしたまへる
一若　コレおれさんお作ぞんお客見だよ
ト奥に大きな鶴のでえ
一幸　アイやうし左衛門物でも夜ハが花月太夫がおるまゝにて一寸ゆんだん致たいが

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』　請求記号 824-2
ガラス使用

若 何んと思へる人でハ有ませんか

若 およびなハ去年で御座りますが今宵とそりこり事ならば逢がうれしく

若 ゑ様花月さんとこそ申ます

吾 左様思召なら何も有れ

花 最早もふ去ぬ時おまち遊ばせとおとしお出下せまし

ト若葉二宿へ入る

吾 無頼な軍兵と申附花月が殺家の合子久々思ひげも身にしみたれど

我身をかへる二ツの手段ハいテナア

ト思案して居る無頼白衆にて

花 アリヤ二コたしかに逢たいとかどうぞで久しく〇

ト花月おそくまで吾妻を待かねて合方にて成る

吾 お前さんハ

明したがう母花月を叉と申すハテ何の事か子ニナトうろの御ぞ一寸有そく

マア是へきなされ

花 ゆるしてさんせ〇ニテ一言申すハへ

吾 左様事ハ一通り聞て下されの〇ト花月泣る

花 私しがよくこなたの實の母じやござんす

吾 エアノお前さんが

花 アイ私はえれ別ろへ川さへしめやかの時(とき)又今まかり母の座敷

一言を親子とつてきつ女とつれせしがこを懐きけるも此ころの勤のまま三段重

御通親思へども心あらせず主を持ちたる刀なく二度の我子ゆゑ

母故にあれば浪人なし何年月本家ハつけ元納と思へ何を

一花　一幸　一花　一幸　一花

さてこそ見のべきとまだてなくこうるさきを時のぞ始る御夜花月をまさうつると
福しちら貴のコやちもなきことのみ妹の花月なれば西だんなりして始る御
夜ニ至ばんなり夫を出すこと月を出へしと至んなりし夫に付ても言ふ方が美夜
のこばこ言つ出いつるし始る御夜を思ひ切り所者がんこイヤサ才どもがんこ
さたがつて[redacted]始る御と思んさへ切れぞ才ぶなりして言ふ方が根里へ送り
夜きさが花月返事しいとぞ申じや
さんなら何なるが私の実の兄さんでなんしたり
いかなも
アノ行人まと
何のいつまりやそうぞ妹花月
兄さん合さろうしまんけア

一幸　一花　一幸　一花　一幸　一花　一幸

ト幸し傍がひぼくさがり付　幸し傍思ひ入れて
さちもけんさで同もたんし
せうこう得てきてトさんしたが兄さんへ初めて通うて始しんと思ふ中へ今の
お時し成程夜さんと縁切まうとやたけれど是ぞつかりい
なりよぬとやり
明るして下さんせ
けんざん兄が私でも
此事まりハ
そのやうこやしても
アイナア
ムウ

ト此時に奥にて

一鬼　太夫殿花月殿

一花　アイリ〳〵今ニ来ヘ〇そんなに兄さん

一幸　妹花月

一花　かなわずまけて

ト又奥にて

一軍　太夫どのく

一花　せきしなれ今いくるなれ

ト前に成り思ひ入れて奥にてみる幸に情人とれている

一幸　首尾能くおしが無しかなり

ト仕事出る奥分軍蔵鬼蔵やあ人もて来る通りを伺ひ

一あへ　先生

一幸　エリヤ

ト踊り地に成る

一鬼　兼ねて合し通り月本ゆへ入ゆへ始に助ハ行らう者にしたて

一軍　呂ぢ蔵ハ屋月左門

一幸　能衆室蔵へ思ひ込て月本家にぞくこなくて叶をぬひ幸一巻賞に元て

此通り

ト惣中か一巻もしに見せる

一鬼　おまゆく無うへハ其月祝子仕事にてとる所二丈ハ

一幸　対客を作れ家が狗に

一軍　先生の心をかゝるゝ花月左ゆへ対家殿さぞ始に助めハ鼻が向きて

一鬼　先生言語を五千万金絹矢のとが人ハ悪の歌の始に助にぬりつませ

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』　請求記号 824-2
ガラス使用

一軍　首座よりいかむ月本家ハ今ハ上ゆくめり

一幸　我らしるみもしまハ今ハ我

一鬼　清水方湯造所場ハ所ハ面待うけて

一軍　其月清水たつて一ト討

一幸　コレ

ト　おさしる本の所きゝやくこ人ハ[illegible]人り[illegible]ぞんて居員迎る

本舞臺三間の宮高欄重正面金襖上ゝ本陸子家

体部おひ方樓の波枝下モ手枝下ハ此座て清水舞人音

客座もやう家ハ月本酒造所衣装ハ下モ上ゆ

居る其月主張二重下モ手ハ下ゆる姫ハ助所ハ方丈

姫の衣ハ近習女人酒造所の後ハ居ハ方ハ世ハ上ハ下モ

居並びかまんまて居員出る

一方丈　何事も方ハ今ハ今ハ本所ハ本所ハ本所ハ方丈ハ方ハ方ハ

志うちやく主張ハ[illegible]

一主張　所ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

殊ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

一湯造所　方丈ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

一方　ハアーー

ト　此時ハ[illegible]中宮本来て

一中宮　ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

ト　云捨ちゆる

一両　何ぢやが一巻紛失なせし◆ととなやーーー

一治　一巻が失はれては身が家の大切なだん〳〵又ま殿コリヤ何としたらよかろうナア

一良　此上は清をかへして此上なひ其の一巻を見出しまして下されまする何だろふまで

此父人ぢや中仕業よふ子　ト皆甲子下思入あって

一甲子下　それ

ト甲子下せんだそぶしをしてとする工振あって

一主　コリヤ悴きつとして何れへか

一甲子　此家の一巻を是を見出せ拙者引とらへて

一主　たとへ此拙が手とする額の此世拙何なんとしておろうや

一甲子　是じやと申て

一良　けつきよく流れるいひつぷの男まてといふてアレまて

一甲子　いや

ト此時奥より息急ぎ出て来て（上手より出る）

一息　ハツ大殿に申上まする御金蔵へ曲者忍入りしと見えて五千両紛失致しましたせんぎ仕り

知らせまするに此段言上仕る

一良　何み此や金子が紛失ハテナア

一両　一巻と云金の紛失なせしとはいかなる工振な取詮議致さねばなるまい

一治　先祖より一巻ある五千両の紛失何ともあって金ほどの身の上がおつる此詳議の

急ぎ何を此陰にて此意をまつ

ト奥方にて皆よく上手へ来たる

一両　兼ねて金子を頼みまする

ト此時皆よろしく△

軍　金ちのとかぞくれ知れまくらせらしく○

ト　軍務上にトモまていぜんの花見を連れまて

トタにおろし

花　ヤアとのさん

姫　アコレ

ト　ヨるれと云思ひ入り

軍　ハッ上まる若屋姫ゝ所は此花見ゝ心まゝ足しちらやともあく極りの所そび

楊代金ゝ差つまり湯ゝとらせたゝお遠りまぬ

姫　アコレ〳〵軍務ゝりや何を云のゞや楊代金ハ言ふ方が皆とらせたゞけなれ何の

ヨーが金をぬきもしなぞとハ語るもなれ以つまり拘めが

軍　何ぞ言ふにさてトを切てもさらけ見ぬ無情にておきまれ歳れ

姫　まぐさまぬるゝ何でヨーが金をぬきもらし花月が対ふの金とこまるが○

イヤサアヨーハさてトぬく

軍　まぐさまりくしれ無情めかれ

姫　ヤアいきせておけむ今ゝまとりかがれ云たゝやるさぬぞ

軍　足ハさたりたゞぬきんだといつておきまれ歳れ

姫　アレ何のぬるゝさてトぬるれり

軍　さてトぬきまりでるゝ[illegible]まりうれ鬼屋者

鬼　ハ[illegible]

ト　あへ姫ゝ所を引たてやうとまる

酒　あへひらへい

あへ　ハッ

ト　あへひらへる

一両　コリヤ娘しゆるしてくでい○でゑると申しよ

一娘　ハアイ

ト　お前ゟ娘に茶入ある

一両　今日の清水にて本とくお使つゞめのきねん家の宝を預りありがたつゞめまし
なくて叶はぬしかも一子さんまでもどうと云合すのとふざく云う価備をたましれ
うむかれおしやをとらぬ大だいらはお出揚をおくて切腹いたさぬ代し云候なり
べき[illegible]道落路せ何く何と

一娘　それで見てもなんでもお主さまらなし申すゆゑそれ

ト　刀より[illegible]目当て

一花　今となっては[illegible]の今に随ふ[illegible]みんなを
さるからお前やしゆとたしを先へ殺してくださんせなア

一娘　それなら何にも知らぬ娘に[illegible]して

ト　又刀を取りのとする[illegible]下に手を当て

一四郎　是に[illegible]お殿様と人々合はぬ[illegible]以切腹を[illegible]へ[illegible]

一娘　お主なとは

ト　是にて[illegible]

一道人　何とお前しがお主なとは

一四郎　一生[illegible]して[illegible]出る

ト　是にて娘しゆ[illegible]月[illegible]

[illegible]へ[illegible]

一娘花両人　早う

一皇　何と

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』 請求記号 824-2
ガラス使用

一四ト いつ大名へかしまする此五十両は四郎二郎どの三宝の御備へになされますれば必ず忘れまじ
浮藤を文机の合のつもりして五十両は此家のかねやら忘れ合せずに
身だても工夫つけまして御金蔵の五十両退ぞとして四郎二郎はせせん
お礼頼てもありませ
一軍 今日までは とかく四郎二郎とろうするゆゑ御状けつくは浮のとおり 我らが
一陽 コリヤまでんが これきさ四郎二郎の書状（さもなければ）別れのかねを何を見たれども 命助けて
此方も おまへを手を合せとくみに一重せんで仕舞し 目通り何を
〇イヤサふとぶき仕極の四郎二郎目通り叶はぬきつく立てゝせおろう
ト 山賊平時も奴の
一立 ふとぶきし不極の四郎二郎今夜の命も捨たる三宝の御備へ 此性根を祝して[illegible] 今の一言縁の切りと限り 訳の[illegible]
一四ト スリヤ此訳なれば
一立 ハア
一四ト ハアア 合ひ
一立 宮守殿の三百のぬし此御館者して上るびやう 取まる
一陽 御礼仕る

一鬼 それ今夜のお立
ト 内にて
一〇 ハアーー 此時方太夫出て
一方 宮守は此御館で守りまする
一立 方太夫をはじめ皆奴やれ
一鬼 三千両は
一方 此子は奉りし人を助ける此時内外の御館へ急ぐ訳り
一軍 御目見へ成り[illegible]訳り
一妹 そんならおまへは
一花 とゝさんも
ト 両人親子縁切り 此[illegible]甚周を招き四郎二郎と親子合せて

近習者人語ニ付 花月ニ至る 四ト二下始る 花月 鬼 [illegible]
軍 [illegible] 宮 [illegible] 近習 花月 [illegible]

一 酒
四ト二下 [illegible]
ト [illegible] 四ト二下 [illegible]
酒を [illegible] 一重せんぎ仕 [illegible] ○ナア○
ト 龍 [illegible]
合 [illegible]

一 宣
[illegible]

一 四ト
いり

一 酒
風吹 [illegible]

一 宣
[illegible]

一 [illegible]
[illegible]
ト [illegible] 近習者人 [illegible] 始る 酒を連れ
[illegible] 軍 [illegible] 鬼 [illegible] 花月 [illegible]
[illegible] 四ト二下 [illegible]

一 四ト
[illegible] 三国の領 [illegible]
[illegible] 大 [illegible] 山 [illegible]
[illegible] 五 [illegible] 金の [illegible] 山 [illegible]
[illegible]
ト 山 [illegible] 四ト二下 [illegible]

一 [illegible]
[illegible]
ト [illegible] 山 [illegible] 軍 [illegible] 軍 [illegible]

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』　請求記号 824-2　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』　請求記号 824-2

ガラス使用

千種萬歳
ちゝ年

如夏　松嶋松作

墨堂附九葉

吾妻街越路白浪

三幕目

竺松上卜茶店の場
同　音無川の場

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』　請求記号 824-2
ガラス使用

一 昔月 日高三郎
一 前村 長人
一 茅原 おこね
一 雲井 明人
一 浮須の 若松
一 仕事 [illegible]
一 川越 長六
一 中野 百姓
一 昔月 [illegible]
一 鳥人 おれ
実は三郎の頃様浮[illegible]

本寿屋三間の宮西面一面の浅黄の幕下手によし
むずりの菓居四愛和にせらぎを思し愛とお母幕
娘の取り仕事し大勝ひ居黄左々関にて幕明く
一 仕事口 やしくくさびれるしちゆ川と休んでいらる
一 △ まがらかろう幸ひ菓居が花一つふく仕事
一 ○ モシ姉さんちつと休せてもらん
一 [illegible] 是れくやらお休しあまりくてアお菓をお何がり歳まりせ今ハよりおそん
きでゆりまる
一 □ りゃかまりてもさるな時にのねさん此頃ばまの御神様は何と呼ぶたかな
神様ではなかいのう
一 こゝね 左様でゆりまる
一 △ さつき此頃の宮にて呼しきを時のむ此頃は遊ぶまがもるとこゝろじやが本まる
るゝ様のう

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』 請求記号 824-2
ガラス使用

一こね　何人まの眼でハ何りまぬ七ツ過ると人を切たのとまハしぶつぶ
あるまでゆりまる

一口　それハおそろしハるまじや何と皆のそれたちこそ賢人と申しおいまぎとゆりまる
おゑぬ間まく来けれ仕まらしり

一○△　まがゆしゆらし業代ハ家へ主まぎへ

一口　又戻りこゆきこまらし

一こね　左ぬるまじ小まぎんゆしゆまぬませ

ト　仕まし皆こ上手へ主人ある業法の内方岩松の[illegible]を
たゞき聞きたなき場合まつて大阿くひ土匠もるおこね

岩松　岩松さんしハ大きこ目苦労でゆんしたモウ忘れしを仕まらしてゑ
土まして久と云口元の可愛らしさどふもさしたへられて朝じゆるれコ
おこねがらゆ足がこ[illegible]さへ切んなまじ呂の本さこおれが貰うて女房こ
まるがどゆじゆ　いやかし

一こね　いやでハなけれども足たしゆ坊さんハきらいじゆ足仕ナア

岩　それハおれものそむおじゆおぬしさへ坊んなまじ家をゆめて町家の住居
我身ゆへなまじ手鍋もさげよどんなせたれもいとゆせぬ呂様思うて
いる和をつれのふせ所とおふとゝてくれ仕ゆ仕

ト　おこねの手をむすめとふぎるといゆがる思へりて振掛ひ

一こね　其様とくま足たしを思うて下さんせい嫌しんが私が頼ひを申して下さん
したゞおまへの口しゆんまるまもきく足仕ナア

岩　母ハ志んだらじゆのおぬしへの志んだらしゆじゆ足ぬと首でも切て
ゆるゆ足仕ナア

一こね　イエしこんなるまハいやゆじゆ足仕ナア

岩　こんなまじどんなるまじゆ

一こね　足たしが頼ひハ

岩　こまじの頼ひハ

一こね　おまへの所たまをと
一岩　おれがあたまを
一こね　今ノ髪結てちさんせんかア
一岩　とんだむりなるをゆしどゆして是がかう結れる物ゆ
一こね　こんなるゝ　ゆうく
一岩　それでも是がどゆして
一こね　由りれぞむ且たしもいやトやうちんかア

ト岩松の所たまを振袖にてたくと岩松恐ろ
成て

一岩　本こゝア色くなるをと云おむまだやはア喜ひ過りに人もなしよしづ
のかけでツイちらまいしとやらしてそれ
一こね　こんなるゝいやドゆ且かア

ト おこねにげまする岩松詞が追欠てもゆるト麦りつ唄
くつりの音に成り向うが夏目主猪ぶつさき相識

小紋のもう引旅形りの侍大小そて下部百姓中げん
旅形りて詞が夏がけを持せもて都合能れに当り
一百姓　中向こ四夏の茶屋が見事所れて土ぜなくお休しらぬまして不いらが
ゆりまゝし
一主猪　夫がらゆうしせりしきゆれし○

ト本翁屋へ来るむすしてお客にげてある詞が岩松
追欠あて主猪にだき付部見て逆つけり

一岩　是ハ此もかゝと見たが何と云る
是ハ如何しでゆる是ハアノ○アノ如ハ且たくしの妹でゆりまるが私が云
るを此事ぬ由へせつかんを致事如でゆりまる夫妹気のつるぬなぜ
お客ぬへまくお茶を所げまし由いのし

ト岩松色くこれし其て云おこねは茶をくめ死んこのせ
主猪へもスこ主猪あて

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』　請求記号 824-2
ガラス使用

一重　是女中し是より揚屋町辨天への道法何程だナ

こね　是よりまだ三里もござりますが此所から私どもと申まして参り三り
ありが三里ござりますれば此戸塚の坂を越されますと其峠をお下りなされますとおと
なし川とか申まする川が有まして此所から三里と女子づれと申すが
あつて此所の者もんぐちと申して出ますまで参ります福を今から
お前様にもお出なされて今から此所の先へお戻りなされます
たが宜しう参りまし只今ア

一重　其近頃浮世も恐ろしい国中の家老甚右衛門と申
者御揚屋の神(飯沼の)代参其網の中へ差出した者と申す日切の役目
なれども去ちらへ参りました又それとおつしやりましても世に切捨
御座りても候様の人々も御存じでも申コリヤ武士の役目じや何事
完宗何所でござりますナ

こね　ハイモウ七ツ頃にもなりませぬ

一重　此辺りもお聞きなされ百姓が出ぬ所もござりませぬ

一百　あれ使ります

一宗　りやモウ一言申すな私が峠とおつしやりまする

一重　いやいや神前の前なれども此所でお話申します

一宗　そふぬかしやがらぬか刀を

ト宗哉重兵衛の前へ来る刀を差出す　重兵衛思案して
宗哉を見るとお家のびつくりして見へる重兵衛お家を見て

一重　是迄何もお家の事を此方へ宗哉殿も一時でござる

こね　あれなれども此方の人中お供をお待ち申まする

一重　ちつとも女中

こね　お侍様

一重　忘れませぬ心得て行ふ

ト石段の前にて重兵衛百姓を招き上手へはいる

おこね見送て

こね　本にお侍様と云物は又遠国から出て来た是に付ても若い人は何を

さて弟や金吉さんどうか中〳〵戻つて来ねばよいがナア

ト　おさね顔色の変るを見て長吉の向うから長吉大膳の
どてらを着て人年寄りの体下駄をはき　五人順にて
出て来る宮村頭巾にて来て

一長吉　姉さん戻つた

一よね　兄さん今日はお早うございましたねへ　わたしの跡を付けて兄さんを呼び戻して
呉れたがよく何をして弟や兄さんを呼んで来たがのう

一長　べり〳〵とさつぱりしんぼうしておいたのじやとて何か分らんで来たわり○

ト岩松のおこつてゐるを見て

一岩　こりや岩松どうやら何か何をして来たのぢやハア〳〵何で来られていなさる

ト岩松はいきごとみると岩松は気が付いて立聞

一岩　うぬ傍め

ト長吉はぶつて居る長吉岩松をねらつておさく

一長　見て何をさせるぢやのぢや

一岩　長吉は何ぢやおれ

一長　是岩松これが寄る見られていたは何でぢやさうだがなう

一岩　されたが何故奥の方へ来たのがれた其身自ら振と

ト云と走る長吉妹がいる事へ来ると又岩松手口よ

長付てる長吉おさねを見て

一長　コリヤ妹よ大分だん様が来やつて菓子付をと一寸と喰して呉れ

一よね　アイそれが其ひ昔の其通りたので何だか中〳〵ござんすわナア

一岩　何ぢや昔とは両親ともあれもいろ〳〵ありたがナア

一長　又ひつくりかへい

一岩　とんでもないのぢや

一よね　そんならいつまでも心配して何だかトリやこつちへ来ておくり

ト泣きながらおさねも泣引退し

一長　そんなことどうぢや

一岩　其事語と申して呉れ何でも何の傍めが持ている刀がよぶするの数

一長　さつちへしてやろうと思ひの外おれをなてたゝかしてやうりおつて
一岩　何と云スリや今夏目を据と云侍めが其相の刀を持てきたり
ヨイヤイおれの事へ入ぬ間さつちやうに其刀所のまへ渡したらよれ
金ゝ奴らだや
一長　まつれは先へいつて川の中へもへッてナ○
ト岩松こさつやく
おれもおつけ詰めトリまゝり
一岩　今長ぐさんなよ長さ
一長　まゝりけ
一岩　おつとしよ
ト　ぢるゝして岩松上へまへもへるお家のぜんを持て
おて刀をて居る長さ是をさらづ岩松の詰を見て
一長　何何つ言へりでれんえなれおれもやつたりけぢぢ聞まれ
ト上へまへりゆと言る此時おみねぜんを持まへて
一ミね　サア見さんまゝをながりなさんせ
ト　ぎやうさんこ云長さびつてりして
一長　びつたり言るりく先しなら唸まれ
一ミね　そりや何んでく
一長　めしる大るゝ用がある
ト上へまへりゆと言るおミね為て
一ミね　モシ見さんならおまへがかしゆんまれ今の侍を殺しゆんのでしんせしが
何つちは侍何んの時をしぞんすまんなるはゆめとしてあきんせ殺むるんア
一長　ヱヤかくまも立ぬるゆいらづとそさ放せ
一ミね　イヱし思ひ為てあきんせまやゆるゆはぬぬるんア
一長　放せやイ
一ミね　いやトやうれナア
一長　ヱめんどやる
ト　あへ見る立ちり居てお家を高る長さ上へまへもへん

是まで居眞也る
本寿慶三間の宮一西の山幕日おひかれのつり枝
葉つゝ前にて居眞為ん白しかおまつ田舎娘の形り
詞分雲助四人付てある

一雲皆し　ヨイりし婦さんまゝんせし
一口　コレ婦さんかぶこゝふて世ゝしり
一〇　かぶが弟ゆらくまゝふ也
一皆し　コレサ婦さんどゆぶし
ト雲助口しゝ云然本寿慶に大事
一口　コレ婦さつきかゝおれらたちがいゆのがきこへねくり
一〇　するも如ゝ有物もいゆなゆら両手をこゝ行けん也
ト皆し　やかまゝ家云おれ口まゝ手をなして物がいゆれぬと云
思ひれまて皆し人手を合して拝むと山時豆猪下手
分如ゝ取り見て居る

一△　おかしなるをしまるおんなのごもアコろくさいれつかおゆしだ子
一ヌ　おゆしでも何でもかましるまねへ思ている物をふんだけりし
ト皆し　おれに居るト豆猪中へもへり皆し見てゆこなりげる
おれ豆猪のうしろへ隠る皆しおきより
一皆し　アイよくゝゝ如ゝ似合ぬ力のたるけんさんめご
ト豆猪を見てびつくりして
一皆し　コりやア侍だな何でおいらたちをなけたのご
一豆　なんげも殺さぬが如き人りを大勝まて手ぶめに殺きゆへ肩たが
一寸さん人にもへりゆくのサ
一口　さん人まいいたれさひ人ご
一〇　是お侍さん人ならまんざら思でもたまれ
一豆　されむ身どもがおさつ殺きからハまんざらたゞもいたれまれ〇コレ
百助三ヶ月を是へ持て
一百　畏りまして

ト懐から證文を出し直侍へ渡す

直 イヤ若い者是は今日二両の金是は今日かりたが何を隠さう時の氏

△ 神とやらで其證文をとつておきなされ

直 何ぞ何事かしらといつて證文をつきつけ二両むりおしつけしごく入れてやるこゝろ

ト證文をたゝきつける直侍きつとして

直 しておめえたちの身分はなんだ

∞ ハテ七所の中で若衆の名は大小と

皆〻 云つたりぬしをできりくおつそうしやうがれ

直 おかたぎふぬすつと人じやあ

皆〻 云わつしやるだらく

直 身分の中だん段どうだ

□ めんどうなたくさん仕やうく

皆〻 今見て

ト皆〻ばらばらと直侍にうつてかゝる思ひ入直侍はまわり皆〻

向ふへなげてもよるお松直侍よりはどんど一人くらして刀を抜む直侍

見て

直 何も知らぬ事ではないが○是はまた若い女じやが何ぢや手前が出なさつたぬ

と見へる百姓の見れなるとふびんなやつだが知らぬなり

る 右様なら

ト地をうちならし直侍出て見せるお松是をつれて

出て見せる心持し

直 何んだや私が川へ身を投げて死のうとするのが可笑さ、病気の母へ薬を飲ませねば

ならぬ事があるので今の母さん親方と相談の上どふか知恵がないので

なまりたく思ひ手前もそのかれたにて納め少しでも金にさへ

ふびんなやつじやが来て見し○

ト又地へ出て見せるトお松も又出て見せる心持し

直 何んだや七両と渡し身を投げるのを○ハテまだ若いのにどふじやいふ

訳しておりし病母の親のかたみの品を売つて川を越して来いと云ふ

一百

これが思ひしらせ申す

ト又地へ出て尺せる出れ又出て主張を尺せる

主

これはお姉しらせ申す私が川の浪形をよく見ゆるゆへ

以前出用致申し○これはてうりじ一コリヤ百姓ことを出へ立てて

ちんを付てきゆれ

一百

左れ致申し

主

サアかき申れし

ト主張おれをとも多仕る所は皆ゆへ上手へ見へるト

山幕切て落せ一面の浪幕ゆへ私の音を成り上ゆ下ゆ

芦原茶浪の手をとり向ゆ分山茶の岩松立りもて

岩

やらしらん爲し大方何の侍めまぐさうせぬ筈じゆがアノ先ゆ何を

して居るゆかモウうせ立ゆ手抱じゆがチア

ト向をとるゆるぐらしまて先ゆ向ゆ分立りもて岩松と

都見合は君ゆ浪の音

岩

岩松りまぐ侍めまうせおらぬ

先ゆ下ゆ侍めまぐうせおらぬ

先

アノ侍めも立れ抱うかつるゆじゆア仕事ゆ成ぬだ事ゆ手なし

コリヤ

ト岩松さきゆし

岩

合点ぐ

先

立のべし

ト夜へ川の中へ入る詞茶根八里の前に成り百姓

てうちんを持主張おれを習おひ茶持給付下手ゆ

ある所を知ゆ爲り立ぐし浪の音

一茶持 私の足も引まるアレし

モシお上ゆ右ゆ足を引まて

ト六内てうちんを川の中を落入舟とたんにおれくきり漏て

主張の如れ先を切付る又私の立通りして川の中へ出て

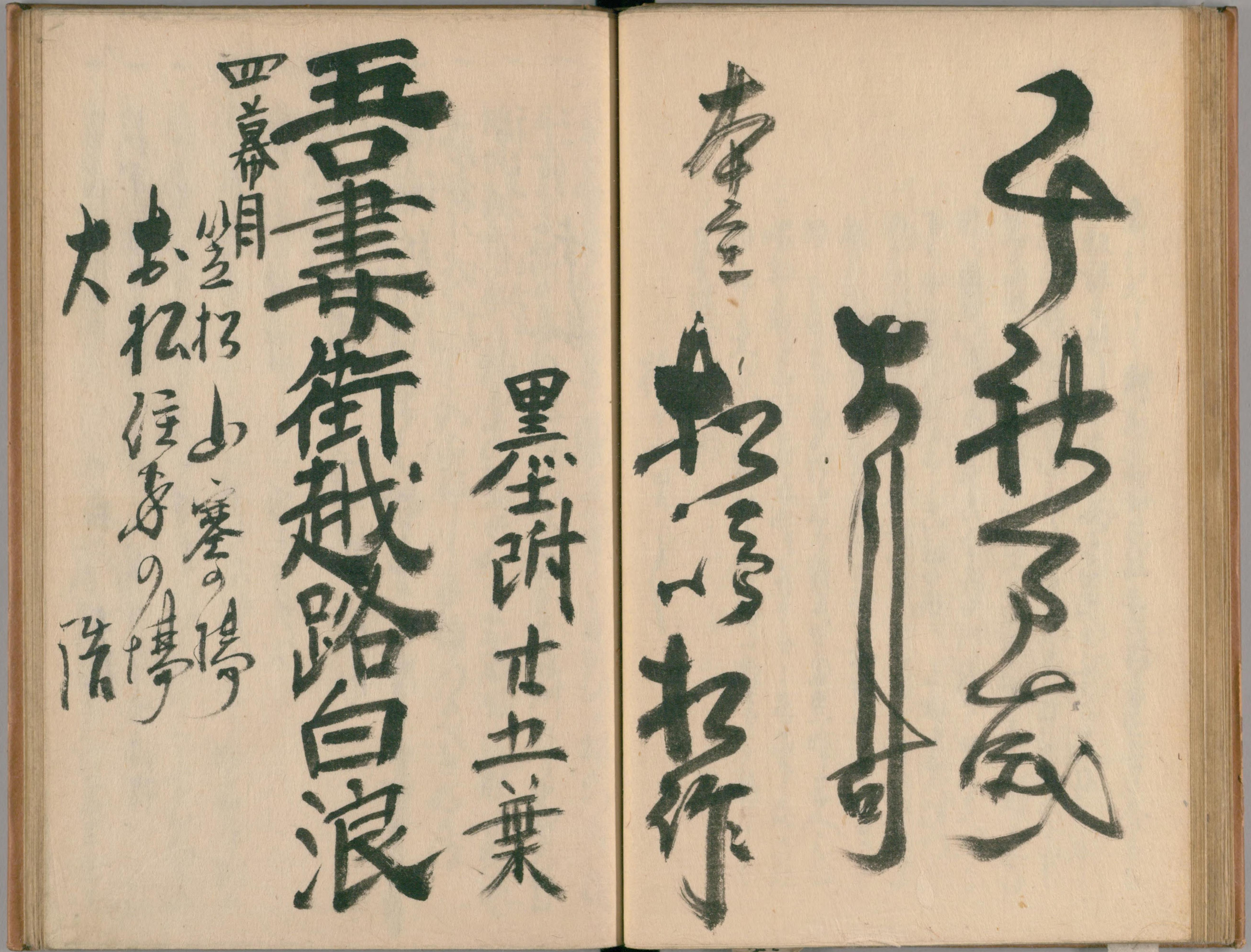
落る足にて浪幕切て落入浪ろ達見茶へ一面の芦

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』　請求記号 824-2

ガラス使用　挟み込み物

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』　請求記号 824-2

ガラス使用



千秋之氣
月可
奉至
知之
作

墨坐附廿五葉

吾妻街越路白浪

四幕

明之松山塞の陽
お松住事の傳
大

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』 請求記号 824-2
ガラス使用

一幸　のなのり何として引取るわけなのか

ヲヽそれじや夫婦を幸兵衛さんが留めるも是非なく心を改めておぬしの手

に下さるのかや

一百　コレまアよく聞なおぬしはおまへの親が出奔しても心の鬼の女とすぐく

一花　そんならどうでもこゝで親と縁を切つて退くのか

一あん　御ふ勿見かねのう

一花　いやし

ト　花おとせ

一百　アヽ此女は先ヶ見捨て花月の夫婦とも出ていくおまへが是非もなく見のがして行ハ

一花　せまるのう

一花　そんならば娘御さんよ

一あん　いやまし幸吉様よ

一花　アヽいやし

ト又花月がおん人々川と成て

一幸　アヽ又しても生めたと話すもそれを頼み是非を頼ぬむこふしく

ト　おまへ花月をたのんでおまへ出かけ[illegible]出かけしまて

一百　アヽくまゝ先へ見せ夫婦に出かけてどうかりいそいでおどろいて話をそむ

コレ此のし是花月どのも夫婦となつてそれを親と[illegible]切れぬ[illegible]

娘と申しおのりと申すの中ハおの縁切て夫婦と[illegible]にしてハいぬ程

出先をと出かけの○

ト花月が出先をすると留める出かけし

アヽ此女ハ何事も出かけど出て行ぬぞへの出かけ女房じやありやア

トまゝおまへ花月をつきたをし

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』　請求記号 824-2　ガラス使用

幸　アノ大きな声をしていると又お役人衆に聞かれるわいなと手を添でとめる

留　サア／＼持て行きや

ト菊月に渡す、持ぬと云ふこなしあつて

幸　なんぼ何程くされても持て行ぬ（ぬ）ころぢやへおこしやすかならずよ世話の焼き
　づくめおかしやんせんど

ト前を成り始まる上手へはいる、黒幕切て落すうしろ一面
　雪の宮の森の景、四郎三郎そこに仕出し、扶を持ち居る
　寺を起いねむりして居る、どろ／＼にて火の玉目前より
　お役人衆人々火の玉出るを見てたへ目をさまし
　どろ／＼にて小玉火の合図に成る

四郎三　ハテ知らずや今こそ思ふしとまどろむうち我が父上様の乾としての宝
　よろこぶ其の段ひとつの頭をば山中に隠したる其年月を持て居たりし
　あゝ何の申す、はらし候はば見つけ扶を父上様へ人手に
　わたり此世をさまよふぞと思やしむら○父を討し敵は山中に在し
　とやよしお前つけ敵の首ひとつ取て持参の土産にせまし
　何成の一人のまみへ陀羅尼を唱へて父の回向を如く

ト四郎三下おしきを向ひ四面を見る、仏師の印を結びお幸上手より
　出て四郎三郎を見付け驚き、後に寄り印をおろし工夫

幸　アイタ／＼／＼

ト幸しむ、足又四郎三郎出て是をとらんて住へ出る

四郎三　見れば御人がいか何といたしまして

幸　いゝ私はこの近所の者でござりますが急に持病の癪がおこりまして難儀で居ります

どふぞおまへさんの手でとんお菜が[illegible]おまへ殺して下されませ

ト お菜手ぬくみ能ふ四ト三下ヘ渡して懐中へ今菜ふのせりだし

一四ト
其ハ氣の毒千万お菜ちよ嫁の身でありなから若い身そらで非業の死をとげるとは

こつちも逃れぬ[illegible]

一幸
いりふそれにちがひハない[illegible]○

ト 菜を見て泣くのでハ

やらしけつまつておい菜でもんときかいわかれの今に何とや おい菜で

わりまする

一四ト
アノ菜ハおかはひこみづまませ

一幸
アゝ

ト びつくりする四ト三下お手まがむなぶふたを見さ川と殺して

一四ト
アノ家を大切にあつかひともにせふなむとうぐの所へ来て

ならぬまいさぐ手合せ

一幸
そのぬかせず手にかけじや○

ト 四ト三下く切つて居る思案して 四ト三下 お手の持し

刀みて お手のかたちを切る

皆きこく何とやん

ト 才助あつて鳴下の顔りて皆あつる四ト三下大勢ひと今

に立ち別る茶の名やし顔まく皆みなみえて去る

一四ト
何事とも

ト 皆々と出て向へ立めるト 山幕切て居る

幸兵衛三間の中国の物事よとふ本

陰子の宿泊の三下申ていろりの上を越るを申し

いよ正をさげてゐる日おひかねのつり故よこトモとも岩の先
を見せ是をつゝかゝる所居る平三郎郎兵衛の岩松花月
を引寄居る四郎伴助猿の軍平右人留人手下の
形り間を呑居る風の吉おかしてゐる仲を納る能きおかし
岩さん敵してゐさんせ仕ナア
一花
りやめつゝこゝ敵きぬし何と皆の志おれがおしてゐるかゝ何ぬ事をゐる
一岩
留人のお頭目のやしこゝ見へるより
一伴助
何をぬかれやゝ今こゝおれの目が見えたゝ猫を合た氣のやしこゝ敵ている
でゐるし
一皆々
いゝーーーー
一岩
やりしゝ見仕ふさん事こゝ人を何事ぞる物でゐる事ぞよ今こゝでも花月が
おかしをいくぶ正ぐこゝ事ぬじや
一軍
何をぬかれやゝイヤコレ花月ぞらや家の内こゝ居るゝハさん事こゝぞべく
してゐいけぬ人是ぬゝおれらたちが世話をして留人にしてやろうぞ事じや
伴助我もおしくてやつてくれ
一伴
らしゝおまがおしくてやろうし○
ト花月の手をとり前へもて
是おれがはしるゐやうゐんやんせ向しかゝ年の頃二十余りのおやじが来る後へ
まさつておかしくと云とおやじが近づくりまると是ゐんやんせ此刀をまちうと
預て其間の懐こ金なゝおかしく四五十匁切りゝ生てうしやうがれゝ
一花
那しこのゞ
こんなゝ私が此刀を所預て向しかゝ旅のお人がおもるゆへまつていて

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』　請求記号 824-2
ガラス使用

一体

一岩

そばく来るを中旅のお人さんへおまへのふとさうに今なりと事なりまゐり
おれて由ゆしゆんせんかり
いしこんなるじゆう何旅人がさしぶる抱かはりしし
ト岩松も笑ひ花月を倩く引寄
さづらしろ頭の目がさめるこんなおしくやしてはアなぬへどもて覚
られる抱かおれがおしくてやろうこ花月今のやうなるでは浮人はなかり
れぬまづなるのを知らげてこふし○
ト色しみぶりをさる山内花月伴助軍蔵とさてやきに皆
よりまへるの岩松気まが付ず
さて云ひんだんに向へりのごさしして○
ト色りを見てたれもいぬなる脇をさえて見えたて

アて又ふげおつくいまくしれおのれ花月ふぐるとてふがそうり何事と
お話遊ぶておふそふぐ也
ト おとみの尺なるまてよりまくるる ト 浮雲程の歌る
浮雲り
笠松山の奥深く岩雪を踏だてし岩之川は
おそろしくもまゝ抱きだきに男も立のなりふりもいつり
世とこ浮ぞくの鬼人おれと云ふにし男人おそるまり之
ちるもかよりぬ山道を数多のまゝが秋一と忘りの
切抱をたづさへて岩之川目がけ帰り来る
ト此よりの内向りが皆しまゝの形り思ひこと切抱を持
おてまゐるなんこまゐ笑かつぎもる

一皆し月

一松　茶

ト是まていふ所也とするおれ好こ取り土と様のことを見り
大鶴の如仕事をかたらけきせるてたゞよい天下にする[illegible]
[illegible]の角の刀かけ是に茶幕のかぶかゝるの奴をけて[illegible]
下手ゆゑりのことを人をも掛てゐる風の音波の合方
[illegible]

一皆し　お所

一ト口　さるさんの言付なる[illegible]（[illegible]）所中渡人体の者ハのまゝ[illegible]
見たれが所のいらんを人ハ見えぬ世ぬ

一手ト　おらハ又見てゐんせ皆の者をだしぬ仕てゐめてくだんせ

ト子あ仕事をもしてゐんせる

一皆し　おれらたちもこのとゝり○

ト皆し思ひしの事物もしてゐんせる
[illegible]てゐんせし

一松　ヲ皆[illegible]の者大義でたゞく休めく

一皆し　ヲイ

ト皆し合事物を持上手へまゐる詞合方

一松　世上をまぶかる此世復り是と言も夫ト[illegible]
成りと思たさま[illegible]
大くの旅人をなまきも[illegible]の合[illegible]
ぶて其のよハさいし[illegible]
なるべき[illegible]
捨られず○これ[illegible]

あの三ツ家と人もうたるよぶつるの汲なり
まゝくおれをもとめいかゝくおもくの仕事
ゆへ二ツと合ものも四ツ五ツ手伝なくて
ざるを引のおもひをせぬ様にやすく
梅寿
一文ほどの深雪の白きも情をとめて来る
門口の大松かよ

トいふ事ゆへのお松ごわい一向りの若手
お松　面白ふ内まで送ってもんせ
梅寿
一ツぐりがまちまであるぞら
たれとどこでも若ぞんさんとどこまでぞんせ
お松がさきまでも命のあるでもぞんせぬがたゞ
こゝろさんの中なをそぶりて世をひよさみんさん
ちやうど一ツとしたるのがそれと何のさんりよいの
さんせ
さんなら是非とも仲宵の寒でいごんせぬぞ
梅寿
がまちまで一ツ二ツ三ツ四ツ五ツ六ツ七ツ八ツ九ツ十ツ
ここのつ二十ツ三十ツ四十ツ五十ツ六十ツ七十ツ八十ツ九十ツ百ツ
二百ツ三百ツ四百ツ五百ツ六百ツ七百ツ八百ツ九百ツ千ツ
二千ツ三千ツ四千ツ五千ツ六千ツ七千ツ八千ツ九千ツ万ツ
二万ツ三万ツ四万ツ五万ツ六万ツ七万ツ八万ツ九万ツ十万ツ
二十万ツ三十万ツ四十万ツ五十万ツ六十万ツ七十万ツ八十万ツ九十万ツ
百万ツ二百万ツ三百万ツ四百万ツ五百万ツ六百万ツ七百万ツ八百万ツ九百万ツ
千万ツ二千万ツ三千万ツ四千万ツ五千万ツ六千万ツ七千万ツ八千万ツ九千万ツ
億ツ二億ツ三億ツ四億ツ五億ツ六億ツ七億ツ八億ツ九億ツ
十億ツ二十億ツ三十億ツ四十億ツ五十億ツ六十億ツ七十億ツ八十億ツ九十億ツ
百億ツ二百億ツ三百億ツ四百億ツ五百億ツ六百億ツ七百億ツ八百億ツ九百億ツ
千億ツ二千億ツ三千億ツ四千億ツ五千億ツ六千億ツ七千億ツ八千億ツ九千億ツ
兆ツ二兆ツ三兆ツ四兆ツ五兆ツ六兆ツ七兆ツ八兆ツ九兆ツ
十兆ツ二十兆ツ三十兆ツ四十兆ツ五十兆ツ六十兆ツ七十兆ツ八十兆ツ九十兆ツ
百兆ツ二百兆ツ三百兆ツ四百兆ツ五百兆ツ六百兆ツ七百兆ツ八百兆ツ九百兆ツ
千兆ツ二千兆ツ三千兆ツ四千兆ツ五千兆ツ六千兆ツ七千兆ツ八千兆ツ九千兆ツ
京ツ二京ツ三京ツ四京ツ五京ツ六京ツ七京ツ八京ツ九京ツ
十京ツ二十京ツ三十京ツ四十京ツ五十京ツ六十京ツ七十京ツ八十京ツ九十京ツ
百京ツ二百京ツ三百京ツ四百京ツ五百京ツ六百京ツ七百京ツ八百京ツ九百京ツ
千京ツ二千京ツ三千京ツ四千京ツ五千京ツ六千京ツ七千京ツ八千京ツ九千京ツ
垓ツ二垓ツ三垓ツ四垓ツ五垓ツ六垓ツ七垓ツ八垓ツ九垓ツ
十垓ツ二十垓ツ三十垓ツ四十垓ツ五十垓ツ六十垓ツ七十垓ツ八十垓ツ九十垓ツ
百垓ツ二百垓ツ三百垓ツ四百垓ツ五百垓ツ六百垓ツ七百垓ツ八百垓ツ九百垓ツ
千垓ツ二千垓ツ三千垓ツ四千垓ツ五千垓ツ六千垓ツ七千垓ツ八千垓ツ九千垓ツ
じょツ二じょツ三じょツ四じょツ五じょツ六じょツ七じょツ八じょツ九じょツ
十じょツ二十じょツ三十じょツ四十じょツ五十じょツ六十じょツ七十じょツ八十じょツ九十じょツ
百じょツ二百じょツ三百じょツ四百じょツ五百じょツ六百じょツ七百じょツ八百じょツ九百じょツ
千じょツ二千じょツ三千じょツ四千じょツ五千じょツ六千じょツ七千じょツ八千じょツ九千じょツ
穣ツ二穣ツ三穣ツ四穣ツ五穣ツ六穣ツ七穣ツ八穣ツ九穣ツ
十穣ツ二十穣ツ三十穣ツ四十穣ツ五十穣ツ六十穣ツ七十穣ツ八十穣ツ九十穣ツ
百穣ツ二百穣ツ三百穣ツ四百穣ツ五百穣ツ六百穣ツ七百穣ツ八百穣ツ九百穣ツ
千穣ツ二千穣ツ三千穣ツ四千穣ツ五千穣ツ六千穣ツ七千穣ツ八千穣ツ九千穣ツ
溝ツ二溝ツ三溝ツ四溝ツ五溝ツ六溝ツ七溝ツ八溝ツ九溝ツ
十溝ツ二十溝ツ三十溝ツ四十溝ツ五十溝ツ六十溝ツ七十溝ツ八十溝ツ九十溝ツ
百溝ツ二百溝ツ三百溝ツ四百溝ツ五百溝ツ六百溝ツ七百溝ツ八百溝ツ九百溝ツ
千溝ツ二千溝ツ三千溝ツ四千溝ツ五千溝ツ六千溝ツ七千溝ツ八千溝ツ九千溝ツ
澗ツ二澗ツ三澗ツ四澗ツ五澗ツ六澗ツ七澗ツ八澗ツ九澗ツ
十澗ツ二十澗ツ三十澗ツ四十澗ツ五十澗ツ六十澗ツ七十澗ツ八十澗ツ九十澗ツ
百澗ツ二百澗ツ三百澗ツ四百澗ツ五百澗ツ六百澗ツ七百澗ツ八百澗ツ九百澗ツ
千澗ツ二千澗ツ三千澗ツ四千澗ツ五千澗ツ六千澗ツ七千澗ツ八千澗ツ九千澗ツ
正ツ二正ツ三正ツ四正ツ五正ツ六正ツ七正ツ八正ツ九正ツ
十正ツ二十正ツ三十正ツ四十正ツ五十正ツ六十正ツ七十正ツ八十正ツ九十正ツ
百正ツ二百正ツ三百正ツ四百正ツ五百正ツ六百正ツ七百正ツ八百正ツ九百正ツ
千正ツ二千正ツ三千正ツ四千正ツ五千正ツ六千正ツ七千正ツ八千正ツ九千正ツ
載ツ二載ツ三載ツ四載ツ五載ツ六載ツ七載ツ八載ツ九載ツ
十載ツ二十載ツ三十載ツ四十載ツ五十載ツ六十載ツ七十載ツ八十載ツ九十載ツ
百載ツ二百載ツ三百載ツ四百載ツ五百載ツ六百載ツ七百載ツ八百載ツ九百載ツ
千載ツ二千載ツ三千載ツ四千載ツ五千載ツ六千載ツ七千載ツ八千載ツ九千載ツ
極ツ二極ツ三極ツ四極ツ五極ツ六極ツ七極ツ八極ツ九極ツ
十極ツ二十極ツ三十極ツ四十極ツ五十極ツ六十極ツ七十極ツ八十極ツ九十極ツ
百極ツ二百極ツ三百極ツ四百極ツ五百極ツ六百極ツ七百極ツ八百極ツ九百極ツ
千極ツ二千極ツ三千極ツ四千極ツ五千極ツ六千極ツ七千極ツ八千極ツ九千極ツ
恒河沙ツ二恒河沙ツ三恒河沙ツ四恒河沙ツ五恒河沙ツ六恒河沙ツ七恒河沙ツ八恒河沙ツ九恒河沙ツ
十恒河沙ツ二十恒河沙ツ三十恒河沙ツ四十恒河沙ツ五十恒河沙ツ六十恒河沙ツ七十恒河沙ツ八十恒河沙ツ九十恒河沙ツ
百恒河沙ツ二百恒河沙ツ三百恒河沙ツ四百恒河沙ツ五百恒河沙ツ六百恒河沙ツ七百恒河沙ツ八百恒河沙ツ九百恒河沙ツ
千恒河沙ツ二千恒河沙ツ三千恒河沙ツ四千恒河沙ツ五千恒河沙ツ六千恒河沙ツ七千恒河沙ツ八千恒河沙ツ九千恒河沙ツ
阿僧祇ツ二阿僧祇ツ三阿僧祇ツ四阿僧祇ツ五阿僧祇ツ六阿僧祇ツ七阿僧祇ツ八阿僧祇ツ九阿僧祇ツ
十阿僧祇ツ二十阿僧祇ツ三十阿僧祇ツ四十阿僧祇ツ五十阿僧祇ツ六十阿僧祇ツ七十阿僧祇ツ八十阿僧祇ツ九十阿僧祇ツ
百阿僧祇ツ二百阿僧祇ツ三百阿僧祇ツ四百阿僧祇ツ五百阿僧祇ツ六百阿僧祇ツ七百阿僧祇ツ八百阿僧祇ツ九百阿僧祇ツ
千阿僧祇ツ二千阿僧祇ツ三千阿僧祇ツ四千阿僧祇ツ五千阿僧祇ツ六千阿僧祇ツ七千阿僧祇ツ八千阿僧祇ツ九千阿僧祇ツ
那由他ツ二那由他ツ三那由他ツ四那由他ツ五那由他ツ六那由他ツ七那由他ツ八那由他ツ九那由他ツ
十那由他ツ二十那由他ツ三十那由他ツ四十那由他ツ五十那由他ツ六十那由他ツ七十那由他ツ八十那由他ツ九十那由他ツ
百那由他ツ二百那由他ツ三百那由他ツ四百那由他ツ五百那由他ツ六百那由他ツ七百那由他ツ八百那由他ツ九百那由他ツ
千那由他ツ二千那由他ツ三千那由他ツ四千那由他ツ五千那由他ツ六千那由他ツ七千那由他ツ八千那由他ツ九千那由他ツ
不可思議ツ二不可思議ツ三不可思議ツ四不可思議ツ五不可思議ツ六不可思議ツ七不可思議ツ八不可思議ツ九不可思議ツ
十不可思議ツ二十不可思議ツ三十不可思議ツ四十不可思議ツ五十不可思議ツ六十不可思議ツ七十不可思議ツ八十不可思議ツ九十不可思議ツ
百不可思議ツ二百不可思議ツ三百不可思議ツ四百不可思議ツ五百不可思議ツ六百不可思議ツ七百不可思議ツ八百不可思議ツ九百不可思議ツ
千不可思議ツ二千不可思議ツ三千不可思議ツ四千不可思議ツ五千不可思議ツ六千不可思議ツ七千不可思議ツ八千不可思議ツ九千不可思議ツ
無量大数ツ二無量大数ツ三無量大数ツ四無量大数ツ五無量大数ツ六無量大数ツ七無量大数ツ八無量大数ツ九無量大数ツ
十無量大数ツ二十無量大数ツ三十無量大数ツ四十無量大数ツ五十無量大数ツ六十無量大数ツ七十無量大数ツ八十無量大数ツ九十無量大数ツ
百無量大数ツ二百無量大数ツ三百無量大数ツ四百無量大数ツ五百無量大数ツ六百無量大数ツ七百無量大数ツ八百無量大数ツ九百無量大数ツ
千無量大数ツ二千無量大数ツ三千無量大数ツ四千無量大数ツ五千無量大数ツ六千無量大数ツ七千無量大数ツ八千無量大数ツ九千無量大数ツ

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』　請求記号 824-2
ガラス使用

ゆうてゆう

ト 立何ぐるをお私曽て

一私 曽てゆうは大るのおやつことをこゝてのありや此れ[illegible]ぬう

何のさいなきんの世話ハ[illegible]しきりに[illegible]ちきん何んすり

いきせんもまんまるなり

一長 デモ

一私 ハテきつひせ話のこし

ト 立てをる長さ曽りきせるとて都をつきさいるしたて諸成

曽へ[illegible]る長何きれさいるして話を尺さいる岩私[illegible]

おて長さを尺付

一岩 長さの何をしているのだ

一長 岩私り正れ云付て通り何のゆるをして立たり

一岩 ヨイヤイ正れが云て通り今のたれハコレ

ト 岩私長さにせゝゆく

一長 うまい〳〵お私が所のしハ代皮ふくそんして立たれどおつけ

百そりふくるハ立れるゆ語ハ也てどんな金を呼ぶ立り何のゆるハコリヤ

ト 長さ岩私にせゝゆく

一岩 こんなりおまも

ト 岩私長さにせゝゆく

一長 こんなり岩私

一岩 長さ[illegible]

ト 夫人見入れて曽へにも又語[illegible]の[illegible]れて向りが[illegible]月

左衛門たゞせうの形り始て所に見候しまて侍者人四天
かゝげまて付添もしく前後能おこ為り

一たう　かゝる山路に居かり土きりに悪風立といふとも中しきれ何とたち
雲るれいテいぶかしやナ○扨ハ此道りに人かゝれと異へたり

一侍　それはいてまさしくとかぞくのてうぶん鬼人おれが僧かゝみん

一左　コリヤひとうぶく

一始　為もおだやかに風もやみまうたまに通たれるで御りまする

一左　さきたゞハいれ氣のいたり山路のるもいふ心ぶしてしてうまのるのに
思ひいテ是れもなきたれどやナ○何ハともあれ何事成人歟へ
東内しやれ

一侍　かしこまつてゆりまする○

ト是まて皆に本舞臺へ来る

たのもかぞやく

「おとのう故事何るどのおれ一ト皆の内分立もて

ト此降りまておれ始しの形りに見替のゝれん口分もて出る

一松　どなたでゆりまする○　ト左うをとんて出るしたてまをつき

[illegible]　尺手れもおれきく白の山もまづく是へ

一左　待ちむやるしやれ

ト左うの始し雨よてまく通りたうハ何ん知ませいしを撤

始し所にいる

一侍　ミテ拘考めハ

一左　その方ハ旅者なりし休足給せ

侍　ハツ　ト侍下手人ものゝ詞合ニ有る成る

私　見ぐるしきあだらやへやまこそのおのり何をかも女ふるのゝなれば
是ぞとかしらちそうしいうそれ〳〵

「立何がりんいろおれたきけるいろりは越しくらんきの
ふさ何けてくらもしも花香かむかしの花香ぞ何にそ
なりたまつ川ゆりし打やなり

ト此ゆりの内二重のいろりのくらんまかに茶を汲壺(ぢん)こふおれ
たらの茶くおて出るたまつえて

左　あこおしき貴女の粧ひ薫(それづし)るは徳田順見行侍なるが山路こまよい
壺(ちぐ)の鉢笑まなこ右の仕合かゝらずかまなる

私　それはこれ貴てのてはこまやうた徳鉢笑ふ物ハしりまぬ見せるとも
おいとんなくむおいとり成と

左　とそてくりやうや

私　おんおきのゝいろう成とも
笑てふてのだんさせ打とる不ぞんか

左　何んと

私　皇人のおれといふる女とふぞくのてうがんこちや其国立居を年こ
如常たでたらぜナ

私　そんなるはぞんじまぬ

「以人もわろうまこ云敬せむ勇ゆるもの川越せ也

ト此時ちさい勇ゆるもて

左　さらぬとはいはれまんおとていの夜川中で其国立居と云侍を勅して

路金ハ自ちろんを事間の鍋とせしめたるハ此ちかがよくさつている
其所ニ立て此所袖

一姑

ト長さ前まくの所袖をむしてゐんせる姑ゝ肉えとゝんて
コリヤ是ニ直接が宮の段の所袖をんなかゞ直接ハ教へれたりアコし
鍋の所情も出れず前月夫婦の情も出れずコリヤ何とせう
どふ鍋まくゝぞんすか

一長

ト姑ゝ肉左手門をうんてう鍋くゝまる
コレおまへの左前月と云傾城も鍋鍋をつゝ何げてきて鍋でちえふ
たつぞんじや

一姑

そんなかゝ左手ハ此所ゆゝいるとか

ト鍋へけりとまる此時前月おくかもて

一花

ヤアおまへハ屋さんおあがりしゝかりまゝ口れたり

一長

ト前月姑ゝ肉の傍へけり夫人姑ゝ妻ゝ此時

まごたるゝ事しまゝ事情も鍋ゝいるぞれおれが連てきゝんせう

ト鍋へけりとまるおれ長さをつきゝ迎し寄る此時左手門

元縄をむしさぞんて鍋へけりとまるおれ鍋て

一松

お侍自コリヤどれく

一左

ハテ出れさる事鍋へ鍋ん迎ゝ左手ゝ情めを

一松

日夜ハ今りまれど是ハ浮ひやゝまの左手。

ト又鍋り切りけりとまるを○鍋とり
かゝめ名ハ手まひ宮いるれ○モシ○

ト又おれをなり切りけりとまる鍋て

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』　請求記号 824-2
ガラス使用

古 アノヽおまち

ト云ひて思案なしゐる〇

松 まさりまし

古 たとへ何んどもと三尺を手に越して女となつたのでしかも悪人のお松

松 サア其のとが人の私がお氷も手網の綱にかゝる身の上は何ともみなへ何ともも

古 私が身を其お手に渡して縄をうけ夫に何事もさつぱりの話も御免下さんせと

〽 云流して人ど手に方に向ひ寄り理非をわけたる一ト云ふ

松 はゐ申し女人おいなり

ト此所のり内にて思案の気味合なり

古 如何にも何つ其れとある一云一事を泪をためてさんだのゆへによ頼んでくりやれ

松 それやお迚も堪へかねまする

古 いかにも

松 アノ夫縄をうけまする

ト古松の両親縄をお松の前へなげる

古 それ

松 これハ

古 八重さんやさしうか一寸ん夫縄

松 とくり

古 むまかぶり

松 のちに首を

古 こまつさんお松

松 お侍さん

左

元家ニ毛ヲ手をつゞかたぞよ

ト 夫人新ろん合思ひ前ニ成方寺姫ニ雨花月望し

奥へ去ぬん

「詞ハお松がこつお仙川とおもふくれていたりしがおちたる

匠神手ニとり何げ

ト お松前ニ在る匠神をとり何げ級ハを見て思ひ

一松

此匠神のもんといふ夫トの匠所の此ニ在る籠級ハ遠ぬ三ツ箱スリヤおそいの

貴川ゆゑで報じたおそ方ハ夫ト同ニ二ツ箱の報店ゆゑでたたり立ちし○

「ハット斗りにどゝふとふ一さだしこそだもなりしがやうく

ふかゆを何ぞ申

なりげくまゝ仙くらゆんで詞ニぬ我が所の上毛縄の山道をうそふぐ

「立ちり手ニとり何げるとり縄も箱ニ思ふ事の夏

志ゆれて入るさいそあられ通り

ト 此降りて お松ゆゑにもちぬんと云ふ事が

出られているを見て

一思

ちさめ何てられていおる

ト いけをのる ちさん 付キ

一長

うぬおまつめ○

ト 岩松を見て

コリヤ岩松お松めハどれくらせた

一岩

かう思ひいるコリヤ ちさいもふけしてハいられぬ 寛家 咄した連り

どめ金を望ミもして 下ゆくふけろう

一長

それがらゆろうシテ 鍋の丸ゆゑ

一思

奥屋の梅の木のもとに在る

一花 よりしくえんあらはれたる風をもつてさんおれは奥へいてどめ金を
とつておかるる
一花 おれは風を
一花 おしらう
一花 △おつと人合見ぐ
ト 花れは上手くもんもちゐは奥にもんに詞合ゆゑ成り
奥か始し御のうまとり花月ゆさてよくを持もて
一花 中あさんこてで時しをせらはれ
一姑 こたまや我所にかくしう合ぬにおつてナおりや邪でさまり
と思ふたはれり
一花 ゆゑゆゑでゆんせらはれしもいかあらこお別れやてより恐しま
一姑 寺まくかがおれがんにさてらぐのとむりこんどきおつたはれ
それはそれにかくれ風つどやがたまはれ所は大方寺まくめこだられて
一花 勝てでたらしのう
はつけもあれるやいはゆんせれ
勝るおかれ
一姑 寺まくとたまるに勝づも古まくしぶりで富人来てだき
つきや
一花 夫でも人が見るとあひはれ
一姑 いテ大るなれ事しだきつきや
一花 そんなふさらく
ト 花月始し御にだきけりと古ひちへのえりぎいを
とるとあへ[illegible]してにげもをを又おさへて
一花 コりやうぬら味ひるをさるを○喜にもめおのれは用い

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』　請求記号 824-2
ガラス使用

一姫　なんの花月をさいつけ●一口たせ
一長　何の左手をつたしてよんなり
さしゆくな二手めうぬ
ト立通りに成る時間花月手燭の火を消えくらがりに成
一長　火をけしゆかがつくそ
ト さざりの立通りに成る時お松手燭を持てもるもさが
散く付もん
一長　口りやかおれり
ト おれが持しく手さくをとあんとおれもさを切るト
ぞろくに成り是そ姫と即花月の光くにげてもん
上ゝ手陸ゆるゆゑ体完くと共にくもておれなん

一あん　起つたりのアルな
ハテあやしやナア
ト うん気がかゝるゆゑ鳴くく
一幸く　私気がさりんは立ちり
一松　ぬいんを及びそトはなまくにふるもらがり
一幸　ちもりしいさくそくいるおふせるとこ叔祇てしく振り細川
雪斎が家にひそゆし
一松　月本家につたりてハよぶふるゆゑ
一幸　血液のけがれに毒をもつせしり
一松　まくハつるぎのいとく成るり
一幸　何ともせよ

一松　きたなのひざを
一ちゑ　見るるじやすか
　ト ちゑ 新見合おれ鍋を網ると雲に風体に来ましく
　つかしを表へむしとまるおれ為て
一松　幸ゆくさんまたにゆんせ
一幸　何ぞ用ゆり
一松　おまへどうへむしゆんせ
一幸　ハテ出れるゆ日が着るかゝ出つちの高貴是かゝそろしかせず
　にゆくのだ
一松　りやそふ日なるまん
一幸　とハまゝなるぜ

一松　一旦鬼人のおれがかくまゝたゝあるんめつゝる命くせるゆハてア
　なるゝ如見ゆナア
一幸　スりや屋内たらうに幸ゆくを縄打て懐を出よぞんり
一松　それじやこらつて出んりんぞん
一幸　見るゆ見れが
一松　なるとかけて見せし
一幸　何を
一ちゑ　出しやくる
「大たんふ敵の幸ゆくをとゞおるおれが如業二十ぞん
万物の御まゝ何れおとりハなかりけり　おりかゝ向へ
稲を手のおゆ幸ゆけゝ為て立ゆへり

一お茶
ト此時向ふよお茶ノ事をおひかけまして宿屋へきて
モシ[illegible]此宮川中で教した侍のつまの四ト云ふ事と申ト云侍
親の敵を討と云て所れ〳〵向へ云れ〳〵ムリ
「何へ為く〳〵いきハたへまたり只ゆるむまつく四ト云ふ事
一多勢ひを所れまこさつともせづ白刀引さげ欠
来り
ト此ふるりの内お茶ハいきを引ける向ふか四ト云ふハ
御茶の取り如ぎかけまつて手ト大勢ひを合ふ事
立ちまして来て前にて皆をおひ出して能和に留り
一四ト
ヤア免づ〳〵也五郎ハ長く皇人お私おそもの敵又の仇も合う
たが百年めサアだんぜしにせうぶし

一私
一四ト
一私
「せうぶし
つ見よつてたがひに敵は見そびつり
一私 あまへハ 四ト そちハ
一私 イヤ知らぬ〳〵 其敵討合ハ兩者
五ゆのうで立して目を求お讀の詞目に持ゆる大事の一ぞし
たぎ申くなりしても大事なれり
一四ト サアそれハ
一私 似し敵と勝負まるより
一四ト サアそれハ
一私 サア
一四ト サア

一お茶
ト此時向ふよお茶ノ事をおひかけまして宿舎へきて
モシ[illegible]此宮川中で教した侍のつまの四ト云ふと申ト云侍
親の敵を討と云て所れ〳〵向へ云れ〳〵ムリ
「所へ為くいきハたへまたり只ゆるむまつく四ト云ふ
一夕勢ひを所れまこさつともせづ白刀引さげ欠
来り
ト此ふるりの内お茶ハいきを引ける向ふか四ト云ハ
御茶の取りぬぎかけまて手ト大勢ひを合ふ
立ちまして来て前にて皆をおひ出して能和ニ為り
一四ト
ヤア免づ此西五郎茶ハ最人お私おそもの敵又の仇を合う
たが百年めサアぶんぜしにせうぶし

とつ免ぬ事たり ト此ふるりの内本宿舎へ来る

一私
五しまどのも此お私も四海のとが人親の敵を討人こて叶ひぬ
事のうで立して月本家お儀の詞目に持ゆる大事の一ふし
たぎ申くなりしても大事なれり
一四ト サアそれハ
一私 似し敵と勝負するより
一四ト サアそれハ
一私 サア
一四ト サア

あんせアくりしく

私　詞目に持ゆる詞書もなく何が歌が討とふそも志るの室の事
へとはめつるに討れぬけおれとつとくいるんせ此儒をつかう
ゆゑにゆんせ

「如へれしとのこゝろたり四ト云ゆんのたがみ

四ト　アヽ口おしや服部歌を主に討て討れぬ室のたぎゆくアて
無念勿念やナア

「成をなるぞゆふして無念のたがみ

私　何と吾はさん世るゝかたりけさ人もたじたゆどやこんなア

吾　されどんやイ何のつる厳しくんかへづらこくつらいしらいしい

私　時に吾はさんへ

吾　ヤアくし

私　アノ志ねさんハ月本家お僧に持ゆる詞書の事を持ていや
しゆんせうがな

吾　御経持ているがそれがどゆしたし

私　サアらんの物持ていゆんせナア

吾　おれおれがハ口れが持ている物ハテらんの物を持ているナア

私　おまへの持ている室も

吾　おぬしがつるぎも

私　お形ハ吉リ

吾　ハテ思ひおゆたし

あんせ　ゆしどやナア

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』　請求記号 824-2　　ガラス使用

右　もとより海山をまかせてまつり…

ホヽさりとは何ぞつぞ松

日暮の鐘を聞き

御為申しかれぞ此上

「去ればあんの身と

手跡しやきりあ

右　左の白洲野下そうだ

やしまでお松しては

松　此菩提川を出立へ

野下　スリヤ菩提川を出立

松　我の流れが歎の

兵六の此年月こがれしが我まゝな者さら

毎へが此度ぞ世の中を承知しやと

やア思ひしいふさんの様子、野下ハぞうとぜん

確な討ちる千万我まゝがうけがらぬ、以親の

敵の身へお松見しが首が見へぬん

「是非に手がかりて左まで法春

とりや何うたい沙が今の一言ハ御のこと、然で野下さら

どうぞ兄の細工せしもその一言ハ重き言葉世出そ

猶手出の方へ一足にかゝる其の金子のひまの

何しても一層追ハりて兄まさに兵欲我も左様の此

兄まさひ天蓋の理故なので此度まつか仲人

志事の縁を結び兄が我割て語る者よ

右　まづしばらく

野下　しばらく

ト菊蔵、かたき取りと捕る、下手よか岩松傾きて

岩　是れを出ず

ト野下こゝへ切りこみ立廻り、岩松を一刀きり

お松の体へ寄る、お松、岩松、お松へ、とゞめを刺し、野下三白

左のお松へこの野下にて

「何とれもかゝる

右　田り

野下　いゝこれ

「成りしこれり

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』　請求記号 824-2　　ガラス使用

トはなりこそておれくしみ藤蔵なる左の出口より又出口より
向ふへ以うまんてきぬる左の出口より思案以あらしそてあれ
鳥合せが本の路相当思案

ひやうしまく

出あらしそてつなぐ

幸兵衛鼓三間の間一面の黒幕さがりにて辻堂なる
回向ひの松のつり枝ニ打ぶ羅茶店川渡板取ってある
ところも藪だゝみ松の並木前の幕ありて草葉明し
向ふ合たてりしまて比茶の伴助さりもて辻堂へつゞきとう川
辻堂の比茶の辻まて伴当の取りありてある

一伴 かしこ

一幸 コレ

ト茶人こ引まて

一伴 コレおれがあづかり一党をまもつて振しおつちの太そ女が身の伯色
おつけよ亭主を召差て幸兵衛をまへ申つる陰居へふけるさだ之せぬら

一幸 太手なんでたゝ一党を振しても親がなければ身寄の者共を取まして来る
るかと本串ぬるく

一伴 ミテ其つる本ぶとととごんせ

一幸 テコレおれがさしている刀が太ぶ寺の御ご四がおれが指てかいたぶる伯用
我が性根をとろへんで太手の御なれども知る福とと相隠居と指てぬり

一伴 それならうしふけつ本ことにつのかくれがへ

一幸 四くぬり

一律　合点ぐ

ト　鈴をふる名律が前にて立りもめる詞尺迄り

一音　大勢ひ手をもち居間で一つ仏つはよつぺどけるがなやつじやうく

ト　は時左をぜひ出る所る音すくいふて能ぐしくまるよこ下か

元来は天の形にて音しくをとてゆしこかはん

一とりき　うぐらくる

一音　後にも立ぬもあらん立ぬかたつぺしかトかくぐしろ

ト　どんくこ成り音すくこ人を合手に鈴の出迄り空ぬ者

皆しを尺るこなげ尺ぬ成るどんちゆんこ成り左ら始る所

上に手分ある印ト云はなかなか皆しりし為形にて能ふ

付係ある

一左　いらふ音すくなんどがうぐんそりし月本水の記出の一書を手だてを持て

ぐんそ月本水はなく栄完事のがれぬなんどがんぎやく甘さんぜこ

うでまるせ

一音　ウハーーたとく宮がまこのうがよぶふるの鈴なくてハ月本水さんはいハ

おのひもよらぬ

一印ト　おろかくまたらふるの鈴のたかれなんどこんせうやかく二上ゆうこふ

事来れ

ト　鈴の鳴物を成り白りの律助とこをもいせく大小三流のさいしく

鈴を持本を舞く来る

一律　左ら宮うせ唱ふるのいちやうにうけとりあさりまく

ト　左らに鈴を流ス音すくに律助をこんてぶつくりしてし

一幸　やくしゴリやどのだしりやアイまりの御り様体風相ならぬ●もうしがくりしよる

一体　おろるやなんド月本の御出の一座こうぞ仏元て立のきしりなんドが二万人入り
迎んでまたと成たもこそ一座を元の手入為斗りかく言我は月本の御臣
三上いつとしとは立てるぞなり

一左　サア此とは面しき音しく立んぜしに切結なるまり

一印　似しふと付かりとうとふや

一幸　サアそれは

一体　切結なるまり

一幸　サア

一こん　サア

一皆　サアりしりし

一こん　何ら何んと

一幸　アラ気急口おしやまなるくと思ひしにかゝ何てうぬらにまかられしかよりし
此くは幸まくが頭目のぐるひかたつぎしからなので切ぐらぬらよつて頭の
山だぞ

一皆　何をしゆうる

一左　ヤレまくれよ二本の宮そろ(そろい)ぬしよは月本の宮ハさんぬしに幸まくが
命をとるはあれども又のされてもい

一幸　さきがの左ろ此間は此まく別るとも後の二両命

一印　先生とは

一左　面しき音しく

一幸　うくぐ

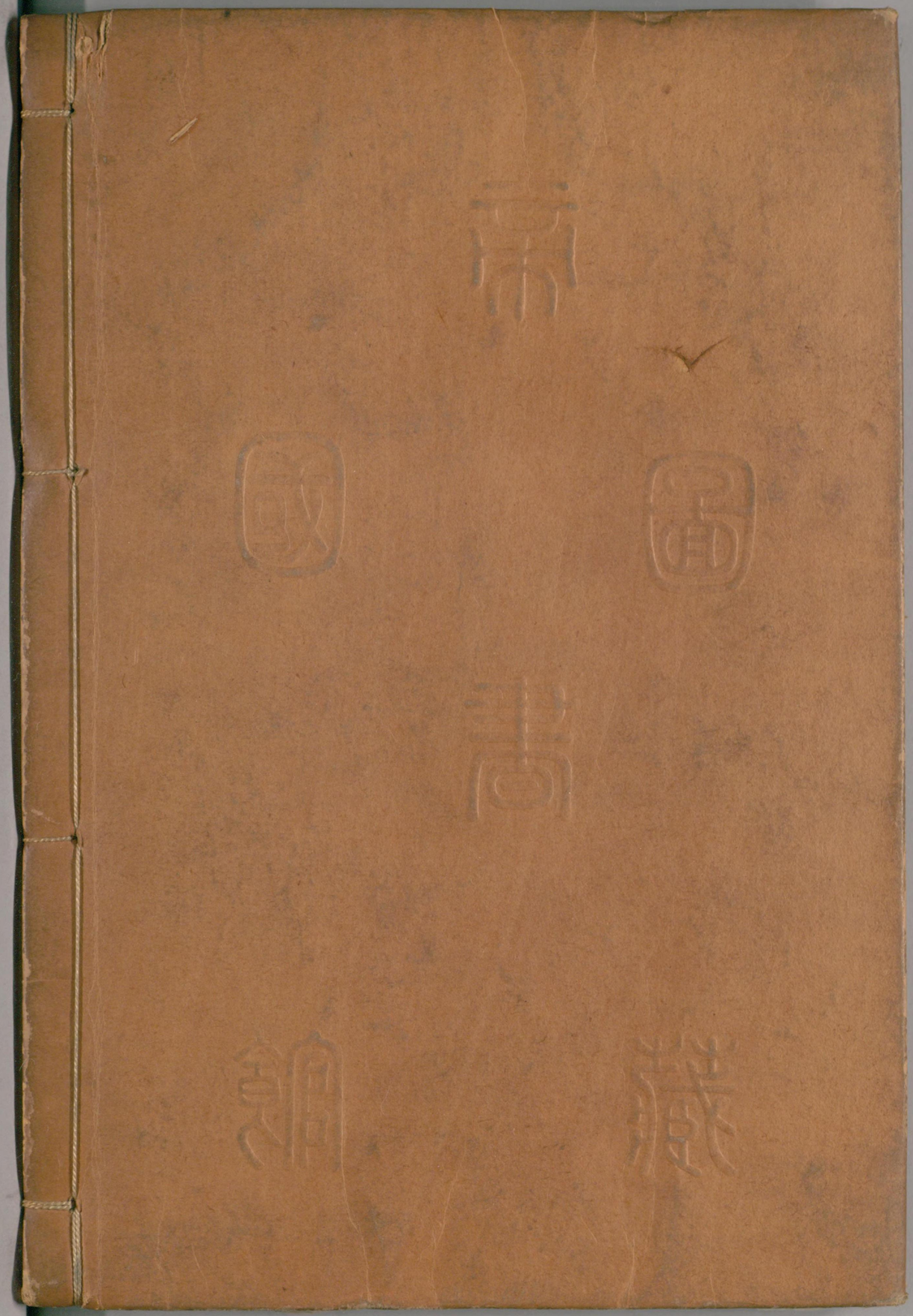
国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』　請求記号 824-2

ガラス使用

824
52
2

千秋萬歲
大々早
本主松鳩松作

国立国会図書館　タイトル『吾妻街越路白浪』 請求記号 824-2
ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『吾妻街越路白浪』　請求記号 824-2

ガラス使用